夜葬曲

悪い顔の猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜葬曲

【Ｎコード】
Ｎ８０５２Ｒ

【作者名】
悪い顔の猫

【あらすじ】
遥か昔、この世は混沌の時代だった。
都市には魔と呼ばれる存在が横行し、異形の徒が暴虐の限りを尽くす世界。その世界には、魔を狩る人々もまた存在した。世界に語られぬ歴史は数多くある。永久に戦い続ける魔と能力者。その戦いは現代でも例外なく繰り返される。これはそんな能力者と魔の戦いの記録である。

プロローグ（前書き）

初めましての方は初めまして、他の作品の読者様にはこんにちは。悪い顔の猫と申します。諸事情で連載中の作品を休止していますので、お詫びと言っては何ですが、この作品をご披露しましょう。

注）完成度がめちゃくちゃ低いです。アホくさいので、覚悟してお読みください。

プロローグ

～プロローグ～

夜空からチラチラと粉雪が舞う。ここは人里から遠く離れた山の奥。しんと静まり返った闇の中を、巨大な影が揺れた。それは滑るように山の中を進む。粉雪が地に舞い降りる音さえ聞こえそうな静寂の中、影だけが無音で移動していた。まるで木々をすり抜けるように影は移動を続け、やがて漆黒の闇に消えていった。影が通った後には、ただ静寂だけが残されていた。

★

男は疲れていた。もう道に迷って早1時間が過ぎようとしている。ちょっとした好奇心から、彼女を乗せて彼は峠から外れた小道に入り込み、いくつにも枝分かれした山道を誘われるように走り続けた末、帰り道を見失ってしまった。ナビゲーションは小道を示しておらず、ずっと何も無い場所で動かない。つまり周囲には何も無く、道すらない山奥へ彼らは迷い込んでいた。携帯電話はとっくの昔に電波から見放され、圏外の文字が左上に表示されたままである。先ほどまでブツクサと文句を垂れていた彼女は、もう諦めたかのように何も言わなくなっている。

「何でこの道はナビに出ないんだよ・・・。ここは一体何処なんだ・・・？」

男は何度目かになる自問自答を呟く。彼女は答えない。よく見ると、

彼女はスヤスヤと寝息を立てていた。

「ちっ、寝やがったか。いい気なもんだぜ。雪が降ってるってのに危機感ねえなこいつ・・・。ガソリンが無くなったら地獄だぞ。」

男は一人ごちて自動車の計器を見る。ガソリンの残量を示すメーターはすでに半分より下まで来ていた。暖房を入れ続けながらの走行は思った以上に燃費が悪いらしい。元々、峠を攻めるために改造を施されたこのスポーツカーは燃費が悪いのだが、拍車を掛けたかの如くガソリンを食っていた。

「持ってあと2～3時間てとこか・・・。さっさと国道に出たいもんだぜ。」

男はそう呟き、ガッチリと4点で固定されたシートベルトを外す。さすがに暖房が入っているとはいえ、窓の外は粉雪が舞っている状況だ。尿意を我慢出来なくなったのだ。車のライトは点けたままだったが、その輪の中で用を足すのも躊躇われ、男は小道から外れた茂みへと入っていった。そして、１０分が過ぎ、１時間が過ぎても男は戻ってこなかった。

★

急に冷め始めた空気に違和感を覚え、女は目を開けた。周囲は黒で塗りつぶしたように暗く、最初自分が何処に居るのかさえ分からなかったが、携帯電話を開けると周囲が鈍く浮かび上がった。その小さな光でさえ、目が痛い。いつもは街中で暮らしている女は体験したことの無い闇だ。携帯電話の光が消えると、周囲はまた闇に溶

けた。眼前の数十ｃｍ先にあるはずの携帯電話を持つ手さえ見えない。女は何とか自分は恋人の車の中に居る事だけを確認した。だがエンジンは止まり、横に居るはずの恋人は消えてしまっている。

「ヒロ？何処に行ったの？私が寝ちゃったからって意地悪してるんじゃないでしょうね？ちょっとヒロっ！？」

女は狼狽して恋人の名を呼んだが、返事は無かった。チラリと時計を見るとすでに深夜の２時を指している。迷ったのが８時頃だ。６時間近く経っても状況は変わっていないらしい。女は不安に押されるように恋人の名を呼んだ。

「ちょっとっ！ふざけてんの？ヒロッ！ヒロってばっ！！！」

女は尚も恋人を呼ぶが、やはり何も返ってこない。この暗闇の中、恋人は何処に消えてしまったと言うのか。

「ちょっとぉ・・・、いい加減にしてよね・・・。」

この闇の中に取り残された恐怖。女は一気に不安になり、声に嗚咽が混じる。とりあえず灯りが欲しかった。

「えっと・・・、キーは・・・。あったあった。あれ？」

女は自動車を復旧させようと、手探りでキーを回す。しかし、鍵はすでに回されているらしく、僅かに動いただけだった。スターターの音すら鳴らない。そんなはずは無いと何度か同じ動作を繰り返すが、女が無駄だと気付くまでそう時間は掛からなかった。

「これってバッテリー上がっちゃった？バッテリー死んだのかしら・

・・？冗談でしょっ！？」

女は事の重大さにやっと気付く。男は消え、自身は動かなくなった車の中で一人取り残されている。しかもここは山奥だ。道に迷ったまでは記憶にある。あれが確かならば、自分は携帯電話の電波すら届かない山中に置き去りにされてしまったと言う事になる。女はまた携帯電話を弄って時間を確認する。時計は午前2時半を告げていた。日が昇るまで後3時間は掛かるだろう。それまで、本当の意味で一寸先も見えない闇の中に一人ぼっち。

「嘘っ！嘘嘘嘘っ！！！ヒロッ！！！何処よおおおおっ！！！」

女はすでに泣き声を発していた。気が狂ったかのように恋人の名を呼ぶ。その時、外に何かの気配を感じた。

「ヒロッ！？」

女はその気配を恋人だと思い呼びかける。しかし気配は何も答えない。女は車のドアを開けると、携帯電話の光を頼りに気配に近付いた。

「ちょっとっ！何処に行ってたのよっ！？」

女は憤慨しながら光にぼんやりと浮かび上がった人影に歩み寄っていったが、やがてその足はピタリと止まった。

「・・・ヒロ？」

それはまさに恋人の姿だった。だが、足が地に付いていない。まるで水の中を漂うように、髪や服がゆらゆらと揺れている。そして、

顔や手首など、服から露出した部分が擦り剥いたように赤い肉が浮いていた。目はまるで溺死体のように白目を剥いている。そして、恋人の周りを骨を露出させた鳥や小動物がフワフワと飛んでいる。

「ヒィ・・・、キャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！」

女はその場にペタリと腰を落としてしまった。異様な風景だ。恋人が最早生きていないことは分かる。だが、なぜ宙に浮いているかは分からない。携帯電話の光がフッと消える。女は慌ててまた光を点け、そして後悔した。ソレの正体を知ってしまったからだ。

「な・・・、何よコレ・・・・。」

それは巨大な塊だった。まるで透明なゼリーのような巨大な塊が、あらゆる動物を取り込んでいるのだ。そして、恐らく消化しているのだ。コポンと小さな音と気泡を残して、小鳥が目の前で水に溶ける錠剤のように消えた。

「ひ・・・、ひ・・・、に、逃げなきゃ・・・・。」

女はやっと危険を理解する。だが、足は他人の物のように言う事を聞かない。全身がガタガタと小刻みに震えている。あまりの恐怖に体が金縛りにあったように動かない。そしてまた携帯電話は光を失い、周囲は闇に溶けた。

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！」

そして女の絶叫が辺りに木霊した。

★

その感触はまるでゼリーだった。闇の中、おそらく塊から出た何かが女の足を絡め取る。女はすでに逃げる事を放棄していた。手足は麻痺したようにダラリと垂れ、片足を捕まれたまま宙吊りにされる。目は虚ろに闇を見つめ、頭はこれから起こるであろう苦痛を考える事を止めた。

「・・・痛く、痛くしないで・・・・。」

女のか細い声が闇の中で空しく聞こえた。ズルリ、と女は塊に飲み込まれる。冷たい。まるで真冬の海に投げ込まれたような冷たさだった。女は無情にも意識を引き戻され、全身を針で突き刺されるような痛みに声無き絶叫を上げる。口からは空気が大量の泡となって上へ上へと上っていった。手足をバタつかせたが、体は何かに捕まったかのように塊の中でもがくだけだった。

（もう・・・だめ・・・・。）

息が限界に近付き、女は意識を失いかけた。このまま意識を失えば、もう戻る事は無いだろう。

（私、死ぬんだ・・・・。）

女は自分の死を確信し、ゆっくりと瞼が閉じた。その時、何かが光った気がした。不意に浮遊感が襲い、女は宙に投げ出される。バシャリという音と共に、大地に叩きつけられた。

「がっ！は・・・。ゴホゴホッ！」

女は飲み込んだ大量の水と背中を強く打ちつけたショックで転げまわりながら咽(むせ)る。そこにまた光が見えた。何か稲妻のような光が塊に当たって弾け、塊はまるで苦しんでいるようにグニャグニャと形を変える。そしてまた周囲は一瞬で闇に飲まれた。次に凄まじい冷気を感じる。辺りの気温が一気に下がった。ビチャビチャという水音が周囲に響いていたが、その音もしなくなりまた静寂が訪れる。

「何・・・？一体何なの？」

女の声が闇の中に小さく響く。だが誰もその問いには答えない。刹那、また周囲は明るく光り、巨大な氷となった塊が粉々に砕け散るのが垣間見えた。恐らく先ほど感じた冷気は塊を凍りつかせたのだろう。それを稲妻が打ち砕いたのだ。女は訳も分からず凍りついた衣服を軋ませながら立ち上がった。

「どうなった・・・の・・・？」

説明が付かない。一気に気温が下がり、稲妻が塊を都合よく砕いてくれた。自然現象で片付けるには無理がある。呆然としていると、凍りついたはずの服から蒸気のような物が上がり、そして服に染みていた水分が蒸発していく。

「何が起こっているの・・・？」

「元が死んだから、あんたにくっ付いてた破片も死んで浄化しただけだ。」

「え？」

女は不意に答えを貰い、声のしたほうへ顔を向ける。暗闇にやっと慣れ始めた目が、人間のような輪郭をボンヤリと捉える。数はおそらく3人。

「危なかったね。あれは低級水魔の一種で、まぁ分かりやすく言えばスライム・・・かな。」

先ほどとは違う声がまた疑問を1つ解決してくれる。

「ていきゅうすいま？スライムって・・・。」

「どうでもいいわ。ここで見た事は他言無用よ。もうすぐ迎えが来て当局に連れて行かれると思うけど、殺されはしないから安心しなさい。ただ記憶は少しだけ消されるかもしれないけどね。」

今度は女性の声。女はただ黙って頷く。殺されたはずたっだのに、命があるだけマシだった。迎えが来るなら素直に嬉しい。

「補足した魔は殲滅。襲われていた女性を1人確保した。座標は今送る。後の処理は任せる。沙耶（さや）、霙（みぞれ）、雷（あずま）はこれより帰還する。」

最初に喋った男が何か無線のような物でどこかに連絡を取る。

「帰っていいのか俺ら？」

気だるそうな声でもう1人の男が尋ねる。

「まぁ当局が来るまで誰か残ろうか。ってことで後は任せたぞっ！」

そう答えると最初に話した男が閃光を残して消えた。

「あ、ずりいぞ雷っ！！！」

「諦めて残ってね霙。」

今度は女性が消える。いや、高く飛び上がったらしい。少しだけ星が出た夜空に影が浮かび、そして見えなくなった。

「汚えな・・・。お姉ちゃん、しばらくここに居ろよ。俺も一緒に待ってやるから。」

「分かりました。あの、助けていただいてありがとうございます。」

「いいってことよ。俺らこれが仕事で飯食ってるんだから。」

「そうなんですか？」

「そう、でもあまり詳しくは聞かない方がいいよ。民間には秘密だからね。」

「・・・分かりました。」

それから２０分ほど待つと、上空にヘリが現れ、女はそのまま何処かへ運ばれていった。

「さて、俺も帰るか～。学校の時間ギリギリだなこりゃ・・・。」

霙と呼ばれた男は、他の２人同様に高く飛び上がると、そのまま夜

の空に消えていった。

プロローグ（後書き）

この度はこのような拙い作品をお手にとって頂きありがとうございます。

あらすじは格好良く書いてありますが、書きたかっただけです。物語自体はそこまで緊迫しないと思います。反省はしませんので苦情は無駄ですよ（〃∇〃）

よろしければしばらくの間、この作者にゆるりとお付き合いして頂ければ幸いです。

第一夜　二人の少年（前書き）

今回から正式に始めて行きたいと思います。

まだ序盤ですが、この回から全開で痛いです。耐性の無い方はブラウザのバックを押すか、携帯を叩き壊す事をお奨めします（、・ω・、）

第一夜　二人の少年

第一夜　二人の少年

先ほどまで窓から香っていた潮風はいつの間にか無くなり、景色は緑に覆われていた。もう何度目かになるトンネルに入る。窓の外は黒い闇にポツリポツリと夜光虫のような光が凄まじいスピードで流れていく。窓には明るい車内が反射され、出来の悪いブラウン管の様に乗客を写し出している。そこには2人の少年の姿があった。1人は眠そうに頬杖をついて窓の外の変わらぬ闇をボンヤリと見つめ、もう1人はアイマスクを装着して完全に睡眠に入っている。電車は各駅停車の鈍行で、2人はすでに3時間も同じ席に座りっ放しだった。目的の駅までは定時でもあと1時間半の道のりである。

「あぁ、飽きた・・・。」

頬杖の少年がつまらなそうに独り言を口にする。向かいの少年は電車に乗るなり停車駅を知らせるように告げて眠ってしまい、彼は3時間あまり無言で窓と睨めっこをする羽目になっていたのである。ペットボトルを開けお茶を飲もうとして、すでに空になっていたことを思い出し舌打ちしてペットボトルを窓枠の側に置く。そして、目の前で幸せそうに口を半開きにしている少年のアイマスクを引っ張って、離した。パチンと軽い音が車内に響き、眠っていた少年が驚いたような目をして起きる。

「んぁ・・・、何すんだこのハゲ。」

「ハゲって言うな。頭の傷跡だ。ハゲじゃねえ。」

「三日月ハゲは立派なハゲじゃねえか。」

「黙れ。俺は3時間も耐えたんだ。残りはお前が起きてろ。」

「まだ3時間かよ？いい加減疲れたぜ。」

「寝てたやつが何言ってんだか・・・？」

三日月ハゲと呼ばれた少年はウンザリしたような表情を浮かべて、再び窓の外に視線を移した。いつの間にかトンネルを抜け、窓の外には豊かな緑が広がっている。随分深い森だ。

「何でこんなとこ来る羽目になったんだかねぇ・・・。」

アイマスクを外しながら、無礼な少年が愚痴る。

「鳴海よ。それは言わないでおこうぜ。まだ何も聞かされてないんだろ？」

三日月ハゲの少年がまた面倒そうに口を開いて、ついでに溜息を吐いた。

「しかし月彦、今さらだよな・・・。」

鳴海と呼ばれた少年は更に続ける。

「ああ、今さらだよなぁ・・・。」

三日月ハゲ改め月彦少年もそうぼやき、また1つ溜息を吐いた。

★

1時間半後、2人は寂れた駅に降り立っていた。看板には大きく『剣が峰高校前』と書かれている。他に降りた乗客は皆無で、ホームには2人だけがポツンと立っていた。

「何も無いんだな・・・。」

鳴海少年がこれからの生活を絶望したかのような声を上げる。

「てか終点だったのね・・・。」

月彦少年も自分の迂闊さを呪い絶望の声を上げていた。2人は明日からこの『剣が峰高校』に編入するためにここまでやって来たのだ。一通り絶望を味わっていた2人だったが、やがて荷物を抱えると駅の改札へ向かう。ここは無人駅だ。2人は車掌に乗車券を渡して電車を降りていた。あとは改札を抜ければ高校まで何も遮る物は無い。高校は駅を出た目の前にあった。

「何だこれ？もしかして・・・。」

「高校以外何も無いんだなここ・・・。」

そう、高校は駅に直結しており、高校以外は周囲に何の建物も見えない。コンビニはおろか民家も皆無だ。ただ、広大な高校の敷地だけが眼前に広がっている。つまりまともな学園生活は送れないと言うわけだ。2人はまた深い溜息を吐き、巨大な門を抜けて校舎へと歩いて行った。

★

現在の時刻は午前１１時、まだ他の生徒達は授業の真っ最中だ。玄関で来客用のスリッパに履き替えながら、２人は職員室を目指す。広い玄関には校舎の見取り図が設置してあり、２人が目指す職員室は２階にあった。正面の階段を上がって左折すればすぐだ。目的地までは１分も掛からずに到着する。階段を上がる際も、どこからか英語の朗読のような声や密やかな囁き声が聞こえ２人とも緊張したような顔で職員室の前に立った。そして、意を決して鳴海少年が職員室のドアを開ける。

「失礼します。」

職員室は、未だ授業中なので控えている数人の教師しか居なかったが、一斉に２人に視線が向けられる。そして、一番近くに居た若い眼鏡の教員らしき男が椅子から腰を上げて２人の元へやってきた。

「えっと、どちら様かな？ここの生徒じゃないよね？」

若い眼鏡の教員はそう言って２人を胡散臭そうに眺めた。

「えっと、明日から編入することになっている佐久間鳴海と言います。」

「同じく林です。林月彦と言います。明日からよろしくお願いします。」

2人はそれぞれ挨拶をする。眼鏡の教員は驚いたような顔をして職員室内の同僚達の顔を何度か見渡した。他の教員は皆首を横に振る。眼鏡の教員は困ったように2人に視線を戻して口を開いた。

「ちょっと待ってもらっていいかな？編入生なんて聞いてないし、この学校に編入なんて・・・・。」

「何も聞いてませんか？おかしいな・・・・。ここって剣が峰ですよね？」

佐久間鳴海が首を傾げながら眼鏡の教員に質問する。林月彦も同じような顔をしていた。

「確かにうちは剣が峰高校なんだけど・・・・、ここって普通の高校とちょっと違って編入なんて前例が無いんだけど・・・・。」

「それは聞いています。能力者の育成を手がけている国立高校ですよね？」

林月彦がそう言って掌を上に向けて右手を上げた。すると掌に小さな光が灯る。

「なっ！君達は能力が使えるのかっ！？」

「ええ、じゃなければここに編入なんて自殺行為でしょう？」

佐久間鳴海もそう言うと掌に光を灯して見せた。眼鏡の教員はそれを見て一瞬で2人と距離を取る。常人ではあり得ないスピードだ。他の教員も立ち上がって身構えた。

「ああ、先生方落ち着いてください。別に攻撃なんてしないですって。」

佐久間鳴海はそう言って掌をグッと握る。今まで揺らめいていた光が握り潰されたように霧散した。林月彦もそれに倣う。

「これで編入の件は信じてもらえましたか？」

林月彦がやれやれという仕草をしながら眼鏡の教員にそう質問すると、他の教員達もワラワラを集まってきた。

★

少年2人は年配の教員の後ろを歩いていた。先ほどから校内の案内をしてもらっている。

「しかし驚いたぞ。編入生なんて全く聞いてなかったからな。お前ら選抜で引っ掛からなかったんだって？」

年配の教員はそう言いながらでかい声でガハハと笑う。

「そうなんですよ。でもまぁ両親が能力者だったんで再検査の通達が着ちゃいまして。それで見事に陽性でしたとさ。」

佐久間鳴海はそう言って同じように笑った。林月彦も同じ理由だった。

「でもまぁ再検査で引っ掛かった奴らは一年間別のカリキュラムを

やってから再度一年生から入るんだけどな。お前ら何で編入なんだ？」

「見たとおり能力を使えるから、3年からでいいんじゃねって話になったんすよ。俺も林も親父から手ほどきを受けてたんで、それなりに

能力を使いこなせます。まぁ再検査組なんで大した威力は無いんですけどね。」

「俺は母親が教えてくれたんですけどね。」

林月彦が軽く修正を入れつつ、2人は広い学内を年配の教員に案内される。この高校はかなり広い。全校生徒で３００人もいないはずなのだが、校舎の他に何やら大きな建物がたくさん建っている。巨大なドームや野球場が3、４個作れそうな広い運動場、それに生徒達が入室する寮もかなりの大きさだ。この学校は全寮制で、全国各地から生徒がやってくる。

「お前ら攻撃能力が使える事は分かったけど、他にどんなこと出来るんだ？」

また年配の教師の質問だ。

「俺も佐久間も飛行術はマスターしてますよ。体術もそこそこ。斬術はまだまだですね。」

「何だ、飛べるならそう言えよ。電車で来たなんて言ってたから歩いてたが、時間掛かるから飛ぶぞ。」

そう言うと、年配の教員は傍にあったドアを開ける。すぐ外に繋がっていたらしい。スリッパのまま外に出ると、ふわりと浮き上がる。佐久間鳴海と林月彦もそれに倣ってふわりと飛び上がった。そしてそのまま2人は上空で30分ほど学内の説明を受けたのだった。

★

学内の案内を終え、2人は再び職員室へ移動した。編入の手続きが出来るようになり呼び出されたのだ。ずさんな学校なのか2人の編入はどの教員も知らされておらず、今まで事実確認に教員達は忙しくダイヤルを回していたらしい。先ほどやっと編入の件が正式に学校の方で認められた。

「しっかしずぼらな学校だよな。普通は編入生なんて決定した次の日には連絡が来るもんじゃないのか？」

林月彦がげんなりした顔で口を尖らせて喋っている。

「まぁ俺達は時期も急だし、普段この学校に編入ってのはあり得ない話だからな。連絡は着てたらしいけど、教頭が冗談だと思って忘れてたってのが笑えるね。」

佐久間鳴海は半笑いを浮かべながら「参ったね。」と肩を竦めてみせた。そんな会話をしながら、2人は再び職員室のドアをノックする。

「失礼します。」

林月彦が先に入り、佐久間鳴海が続いた。教員達はもう2人を見ても警戒はしなかった。流石に皆、ばつの悪そうな笑顔で2人を迎える。

「佐久間と林、こっち来い。お前らのクラス決まったから。」

先ほど学内を案内してくれた年配の教員が手招きする。2人は一瞬顔を見合わせたが、大人しく指示に従う。年配の教員は2人が自分の前に立つと、おもむろに説明を始めた。

「えー、お前ら3年だからクラスは2つしかない。風と水と闇のA組、火と土のB組だ。自分の系統は知ってるんだろ？だったらどっちか分かるな？」

「あー、はい。どっちもA組っすね。」

林月彦が答えた。佐久間鳴海は興味が無いのか窓の外をぼんやりと眺めている。

「そう言う訳だ。理解が早くて助かるよ。ちなみに俺が学年主任の丹野保明（たんのやすあき）だ。お前らの担任はこっちの赤川真知子（あかがわまちこ）先生、美人だけど怖いからな。」

そう言って丹野は自分の2つ向こうのデスクに座る女性を指差す。確かに美人だがアラサーと言うところだろうか。2人とは確実に10以上は歳が離れていそうだ。赤川と呼ばれた女性教員は、2人を見てにっこりと微笑む。

「よろしくお願いします、赤川先生。」

林月彦が少し照れたように顔を赤らめながら挨拶する。佐久間鳴海はチラリと赤川を見て、会釈をしただけだった。

「で、能力者の事について俺から少し説明しておこうか。時間あるよな？」

「大丈夫っすよ。でも今さらって気もしますけどね。」

佐久間鳴海が苦笑しながら返事をする。それに対し、丹野も苦笑を返しながら話を続けた。

「まぁそう言うなよ。おさらいだと思って大人しく聞いとけ。」

「ういっす。」

「ではまず系統からだな。お前らも知っての通り、能力者は火、水、風、土、闇の5系統が存在する。厳密に言えば他にもいるんだが、まぁそれは特殊な連中だ。まだ知らなくていい。能力者とは体内にある自分の力、まぁ能力を使うための感覚、神経みたいなもんだな。それを使って周囲の気を取り込んで能力に変えて具現化する。系統はその具現化した力が、どの形になるかで決まるんだ。火だと炎を模した紅い力、水だと蒼い力、風は碧、土は琥珀、闇は漆黒の力になる。別に本当に炎を出したり水芸したり扇風機になったり土遊びする訳じゃないからな。そこの所は大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない。」

「佐久間、教師にタメ口はやめておけ・・・。」

「失敬、どうも敬語って苦手なんですよ。」

「敬語は大事だぞ。特にこの学校はな。傲岸不遜な態度だと命に関わってくる。」

丹野は眉を顰めながらそう佐久間鳴海に警告した。

「命に関わるってそんな大げさな。冗談でしょ？」

「それが冗談じゃないんだよ。この学校には序列と言うかランキングみたいなものがあってな。それが低い者は高い者に敬意を払わなければならないんだ。特に一桁の奴らはプライドも高い。下手な事でも言うと殺されかねん。危険人物のリストを後で渡すからよく見て暗記しとけ。」

丹野の目は真剣だ。どうやら冗談では無いらしい。命に関わると言うが、序列の低い人間は高い人間に殺されても文句は言えないのだろうか。昔はそういう事件もあったらしいが、未だに殺人を黙認している可能性がある。強い能力者は極めて重要な存在だ。世界にはいつでも魔が存在し、常に生き物はその危険に晒されているのだ。それを人知れず狩り、滅しているのが能力者達だ。故に強い能力者は我侭も許されると言った所か。古い悪習はいつまでも受け継がれていくものらしい。佐久間と林はその事実を察して眉を顰めたが、丹野の言葉に黙って従い、危険人物と序列の１０位までが載った資料を受け取って廊下に出た。

★

廊下を歩きながら、渡された資料をペラペラと捲る。なるほど、

序列の上位はほとんど3年生で占められていたが、7位と10位は2年生だった。序列1位は同じクラスに所属する水の能力者らしい。高部清十郎と言う名前だった。月彦が「あれ？」と言う顔をして宙を見上げた。高部と言う性は聞き覚えがある。それを見て、鳴海が溜息を吐いた。

「高部ってのは例の英雄の血族だよ。有名な話だろ？」

「ああ、例の英雄か。30年前に魔人を倒したつもりになってる人だっけ？笑っちまう。」

月彦が苦笑を浮かべながらそう言った。それに鳴海が続く。

「そうだな。そのなんちゃっての子孫だ。天下の大嘘吐きの血筋だよ。」

どうもこの2人の会話は物騒だった。英雄と言うのは、能力者で最高位の称号だ。所謂、魔人殺しの名だ。この世には人の邪念が具現化した魔と言う存在が居るが、その魔も一概に同じではない。低級魔と呼ばれる物から、魔人と呼ばれる人を模した物まで様々だ。中でも魔人は、100人の能力者で討伐に出た所で全滅してもおかしくない、そんなレベルの怪物だ。滅多に会える物でもないが、出来れば一生会わずに済むのがベターな代物である。そんな英雄を虚仮(こけ)にする発言はタブーだ。他人に聞かれればそれこそ命に関わる。

「まぁいいさ、この英雄様の血族が序列の1位なんだな。覚えておこうぜ。」

月彦がそう言って鳴海にウインクする。鳴海はその仕草を見て、また溜息を吐いた。

「そのウインクな・・・、絶対に他の人間の前でやるなよ。引かれるから・・・。」

「ば、馬鹿お前っ！このキュートさに女生徒も女教師もメロメロだってのっ！」

目を見開いてそう言った月彦を、鳴海はまた溜息を吐いた後に馬鹿を見るような目で見た。

★

学内も粗方見てしまい、2人は玄関に向かう。スリッパを履き替えに来たのだ。後は寮に行き、届くはずの荷物を待つだけだった。2人して靴に履き替えると玄関を出る。寮の部屋は事前に丹野先生に教えてもらっていたので、迷うことは無いはずだ。もう時間もとうに昼を過ぎ、外ではベンチに腰掛けて昼ご飯を食べる学生達がちらほら見える。皆が2人を物珍しげに眺めていたが、誰も話しかけては来なかった。

「何か暗いよな・・・。この学校ってさ。」

鳴海がそう言いながら寮までの道を地図で確認する。丹野先生作の手書きの地図だ。

「てか閉鎖的なんじゃないの？明日から気が重いよな。友達出来るのか俺ら・・・？」

月彦も鳴海の意見には賛成らしい。同じようなネガティブな発言が飛び出す。

「友達なんていらないだろ？どうせすぐオサラバするんだし、そんなのどうでもいいわ。」

まだ地図と睨めっこをしながら鳴海が心底どうでもいいと言う顔で答える。

「でも可愛い娘とか居たらどうすんだ？告る？告るのか？俺告ってもいいのかな？」

月彦は1人でテンションを上げている。実際、2人を見る目の中にはかなり可愛い女の子も居る。その目を意識してか、月彦はキリリとした顔で鳴海に話しかける。

「お前って女の前に出ると固まるじゃねえか・・・？どうすれば告れるわけ？」

鳴海がうざったいと言う目で月彦を見ながら地図を頼りに歩く。その時、2人の前に人影が立ちはだかった。月彦はその人物を一目見て固まってしまう。鳴海は地図を眺めながら月彦を無視してそのままその人物の脇をスルリと抜けてしまった。地図しか目に入っていないようだ。その態度に人影が再度、鳴海の前に立ち塞がった。鳴海は人影には気付きながらも地図から目を離さない。スルリとまた脇を抜ける。

（あいつこの学園の人間は心底どうでもいいんだなぁ・・・。）

月彦は感心したようにそう思った。何故なら、2度も鳴海の前に立

ち塞がったのは輝かんばかりの美少女だったからである。月彦は一瞬で心を奪われそうになったが、鳴海はその美少女すらアウト・オブ・眼中だったようだ。まだ地図と睨めっこを続けている。

「待ちなさいっ！！！」

2度も無視された少女が、遂に鳴海を呼び止めた。これには流石に佐久間鳴海と言えど振り向かざるを得ない。そして、鳴海はそのまま凍りつく。

「佐久間鳴海・・・、お久しぶりね。」

第一夜　二人の少年（後書き）

今まで作者の作品に触れてきた方は驚いたのではないでしょうか？飛ぶ、気をどうこう、さらには属性まで出てきました。明らかに色々な影響が見え隠れしています。残念ながらこういう物も書いてみたかったのです。食指が向かない方も多いんじゃないでしょうか？Ｇａｍｅｒの方もかなり人気が無かったですが、これもプロローグを見てる人間は列島の１／５以下ですｗｗｗ

落ち込んだりもするけれど、作者は元気です（，・ω・、）

第二夜　追憶（前書き）

チートだチート。

文句があれば何処からでもかかってこいコノヤロウ（、・ω・、）

第二夜　追憶

第二夜　追憶

青い海、砂浜に人の気配は無く、鳴海はザクザクと足音を響かせながら歩いていた。日差しは強く、額から汗が流れ落ちる。季節は夏も真っ盛りなのだが、絶好の遊泳ポイントであろう砂浜には人の姿は無かった。何故なら、ここは無人島だ。鳴海の地元から沖に１０ｋｍ程離れた場所にポツリと浮く小島である。鳴海は生臭い釣り餌の入ったバケツを持ち直すと、砂浜から見える岩礁へ向けて飛ぶ。岩礁の周りは深場になっており、イシダイやメジナなど瀬につく魚の格好の釣り場となっているのだ。ここは地元の人間も滅多に寄り付かぬ場所で、鳴海は釣りをするのによく利用していた。クーラーＢＯＸには氷と冷えたコーラ、スポーツ飲料などが大量に入れてある。岩礁に着くと鳴海はコーラを１本取り出して、喉を鳴らして飲んだ。しばらくゴクゴクと小気味の良い音を鳴らしながらコーラを味わっていた鳴海だったが、釣竿を準備すると撒き餌を投げて浮をその少し先に落とす。こうしないと撒き餌に寄ってきた外道や雑魚に餌が沈む前に食い荒らされてしまうのだ。少し流れの先に浮を落とすことが重要なポイントだと鳴海は長い釣りの経験から知っていた。あとは浮が沈むまでの勝負だったが、１分も待たぬうちに浮がスッと沈む。鳴海は竿を立てて当たりに合わせる。大した手ごたえではなかった。

「ちっ。」

舌打ちしながらリールを巻くと、茶色い影が澄んだ水の中に揺れるのが見えた。何度も釣り上げた事のある魚だ。

「カワハギか・・・。まぁいいだろう。」

カワハギとは日本全国、どこの磯にも出没する代表的な魚だ。砂地に多い魚なのだが、防波堤や磯のような岩礁にも生息する。釣り師なら知らない人は居ないほどメジャーな外道だ。釣り方は意外に難しい上、食べると淡白な白身は非常に美味だ。嬉しい外道と言った所だろうか。型も３０ｃｍ近く、かなりの大物だった。鳴海はニヤリと笑うと、硬い口から針を引き抜き飲み物とは別のクーラーＢＯＸに放り込む。外道とはいえ、かなりの良型に気分は乗ってきていた。早くも次の餌を付けると、撒き餌をばら撒き浮を沈める。程なくして、また浮が海中に消えた。先ほどの当たりと違い、力強い手ごたえが竿を伝わってくる。これはメジナだろう。それもかなりの型だと思われた。竿を握る手にも力が入る。大物とのファイトが釣りの何よりの楽しみだ。この感覚は味わうと病みつきになる。

「久々の大物だな。バレるなよっ！」

鳴海は満面に笑みを浮かべながら糸を巻き取っていく。海中にチラチラと魚体の色が見えた時、鳴海は嫌な物を見つけてしまった。折角の楽しい気分も一気に消える。目の前に広がる海の向こうに、波を切るように滑走してくる人影が見える。鳴海の口から溜息が漏れた瞬間に、今までグイグイと糸を引っ張っていた力がフッと消え、しなっていた竿先がピンと元に戻ってしまった。魚がバレたのだ。

「ふぅ・・・、やれやれだな。」

鳴海は竿を横に置くと、クーラーＢＯＸからスポーツ飲料を２本取り出して、近付いてくる人影に目を向けた。

★

白いシャツをヒラヒラと靡(なび)かせて、人影は鳴海の居る岩礁に降りる。鳴海はその人物に手にした飲み物を投げてやった。それは少女だった。白いシャツに青いハーフパンツ。足はサンダルだ。頭には麦わら帽子を被っている。少女はスポーツ飲料のペットボトルを受け取ると、キャップを外して喉を鳴らす。そして、口元を手の甲でグイッと拭くと鳴海を睨みつけた。

「ひどいよ鳴海っ！今日は私と遊んでくれる約束してたじゃないっ！」

少女はそう言うと鳴海に向かって飲み掛けのペットボトルを投げつけた。鳴海は冷静に投げ付けられたペットボトルを片手でキャッチする。そしてペットボトルをクーラーＢＯＸに投げ込むと、自分の分のキャップを外しながら少女に向き直った。

「会った瞬間それかよ。少しは女性らしい慎ましさを養いなさい君は。」

落ち着き払った態度でたしなめた鳴海に、少女は激昂した。逆鱗に触れたようだ。

「煩いのよっ！大体約束を破ったのはあんたでしょっ！？釣りなんか止めて今日は私の相手してよっ！まだあんたに勝ててないんだから、私は一生懸命お父様に技を習ってきたのっ！今すぐ立会いなさいっ！」

少女は凄まじい剣幕でまくし立てる。鳴海は面倒臭そうにペットボ

トルを口に含んだ。その態度に少女の顔は見る見る赤く染まった。無論恥じらいではない。肩が小刻みに震えている。

「あんたね・・・、また適当にはぐらかす気でしょっ！いいわ、いつまでもそう言う態度を取ってなさい。」

そう言うと少女は手を胸の前で交差させた。すると交差させた手の間に碧色の光が溢れ出す。

「ちょっと待てっ！？お前まさかこんな場所でっ！」

「も・ん・ど・う・・・無用っ！！！」

少女がそう叫んだ瞬間、碧色が弾けた。

★

ここは陸から１０ｋｍ程離れた無人島。地元の漁師達はこの島に近付かない。何故ならこの島はたまに、爆音が轟き妙な光が飛び回る、そんな光景が古くから見られるからだ。もちろんそれは怪奇現象などではない。ここは昔から能力者の訓練場として使われているのだ。当然、鳴海の両親なども古くから利用している。この地には代々専属の能力者が居るのだが、鳴海の父親はその専属の家の跡取りと同期だった。故に一緒にこの地を守るように勧められ、鳴海が幼い時この地に移り住んだ。もう１０年以上昔の話だ。その同期は山神と言い、そこにはやんちゃな一人娘が居た。鳴海とほぼ同じ時期に生まれたその娘は、鳴海と共に成長し、当然のように鳴海と幼馴染になった。そして２人は、いつしか能力者として力を付けお互

いに手合わせや稽古を重ねていった。戦績は現在１８７勝７敗と圧倒的に鳴海が勝ち越している。それに不満なお嬢さんが今日も無謀な挑戦を行った結果がこれだった。鳴海の釣り道具は木っ端微塵に砕け散り、お気に入りの岩礁は真っ二つに割れる。攻撃を紙一重でかわした鳴海は、大きく後ろに飛び距離を取りながらまた溜息を吐いた。腕を組んでいる様子を見ると、まともに相手はしないつもりなのかもしれない。そのやる気のない様が少女の逆鱗に再度触れる。

「あんたはあああああああああっ！！！少しは真面目に戦ってよっ！！」

少女は怒り狂い碧色の弾を次々と掌から発射する。鳴海はその弾をヒョイヒョイとかわしながら徐々に距離を取っていった。このまま距離を取って少女を煙に巻くつもりなのだろう。

「逃がさないっ！」

少女は鳴海の逃げる気配を感じ取り攻勢に出る。今まで飛ばしていた碧色の光を手に纏うと、一気に鳴海に向かって飛ぶ。ここからは体術での勝負だ。一気に１００ｍ以上離れていた距離が縮まる。鳴海は一瞬驚いた表情を浮かべたが、その顔色も一瞬だけだった。少女の繰り出した拳は簡単に掌に受け止められた。

「くっ！」

今度は少女が距離を取る。鳴海はもう逃げる気が失せたように、その場に静止していた。

「少しは真面目に相手してくれる気になったみたいね。今回は私が勝つわ。」

少女はそう言うとまた臨戦態勢に入る。鳴海はその様子を見ると、やれやれと頭を掻きながら砂浜に着地した。少女も臨戦態勢のまま砂浜に降り立つ。鳴海は相変わらず構えもせずに突っ立っていた。少女はその態度に内心穏やかではなかったが、頭を振って邪念を飛ばすと精神を集中させていく。碧色の光がオーロラのように少女の体から立ち上り始めた。

「一気に終わらせる・・・。」

少女はそう呟くと、光を纏ったまま鳴海に突っ込んだ。刹那、鳴海を視界から見失う。

「なっ！どこにっ！？キャアッ！！」

背中を強い衝撃が襲う。そして体は制御を失い勢いを付けたまま砂浜に激突しそうになったが、寸でのところで何かに受け止められた。思わず目を瞑っていた少女だったが、ハッとして顔を上げると目の前に拳があった。少女の体を受け止めた鳴海がそのまま少女の鼻の頭をチョコンと弾きこう言った。

「また俺の勝ちだな、真衣。」

★

海に散らばった釣り道具の中からクーラーＢＯＸを拾ってくると、鳴海はコーラを取り出し真衣に向かって投げる。真衣はそれをブスッとした顔で受け取ると、キャップを捻る。途端にコーラが噴出し、

琥珀色の雨を浴びてしまった。鳴海はその様子を見ながらゲラゲラと笑っている。髪から滴る甘い雫もそのままに、眉間に皺を寄せる真衣。だが、軽く頭を振ると砂浜に腰を下ろした。

「今回は私の負けでいいわ。これで7勝188敗かぁ・・・。」

真衣はそう呟き、ペットボトルに残った液体を口に運ぶ。実は彼女はまだ、鳴海にはまともに勝った事が無い。7勝も詳しく言えば、寝坊や病欠、すっぽかしなどの不戦勝だけだった。今の実力では遠く鳴海に及ばない。同じ年に生まれ、同じ能力者の血筋だ。ここまで自分と鳴海に差が付く理由が未だに分からない。ただ、現実として目に前に立ち塞がる問題と言うことだけは理解できた。超えることの出来ない壁だ。能力に目覚めてから、彼女は勤勉に努力し力を磨いてきた。一方の鳴海は、彼女の知る限り努力をしている姿を見たことが無い。単純に才能の差なのかもしれないが、それを認めることは彼女のプライドが許さなかった。いつもの如くまともに相手もされずに負かされたという事実はあまりに重い。今は膝を抱えることしか出来ない。

「なぁ、もう俺に挑むの止めてくれないか？もういいだろう・・・、どうやっても俺には勝てないのは分かってるはずだぞ。何でそうまで勝ちに固執するんだ？」

鳴海は大人しくなってしまった真衣にそう問いかけた。鳴海の心情としては、これ以上この真面目な少女を傷つけるのは忍びなかった。わざと負けてやろうと考えた事も一度や二度ではない。しかし、故意に勝ちを譲る方が彼女を深く傷つける事も鳴海はよく知っている。もう10年以上一緒に育ってきたのだ。そのくらいの心情は読める。だからこそ、こんな馬鹿な勝負を続けるのは苦痛でしかなかった。

「・・・・やだ。私が勝つまでやる。」

やはり想像通りの返答が返ってくる。このやり取りもいつもの事だ。鳴海は想像通りの展開にまた溜息を吐くと、真衣を残して砂浜を後にした。独り残された真衣は、夕暮れが迫るまで砂浜で膝を抱えていた。

★

戦績はいつしか、鳴海の２００勝まであと1勝になっていた。鳴海自身は几帳面に戦績を記録などしていなかったが、真衣がそう言うので間違いないだろう。現在１９９勝３２敗。やはり真衣にまともな勝ち星は無かったが、彼女の力はここ一年で見違えるほど成長していた。実際、鳴海も今までのような遊び半分だと苦戦する場面も多々見受けられる。２人の両親は、お互いが切磋琢磨して修練に力を注いでいると勘違いしているので、真衣の無謀な挑戦はいつまでも続いていた。きっと、まともに勝てるまでいつまでも続けるつもりだろう。それは毎回付き合わされる鳴海には非常に困ることである。そのため、鳴海は真衣にある条件を突きつけた。このまま続ければ、いつか不幸な結果を招くかもしれない。鳴海はその事が常に気掛かりだったのだ。

「真衣、今回は俺の２００勝目になる。これで一旦区切りとしないか？今度負けたら今後俺に構わない、それでどうだ？それなら俺も受けるよ。全力でやってやる。どうだ？」

鳴海の提案に、真衣は耳を疑った。鳴海が自分から戦おうと持ちかけるのは今回が初めてだったのだ。全力でやる。何とも甘美な響き

だ。今まで鳴海が自分を気遣い、手を抜いて相手をしていたのは真衣自身気が付いていた。それを今回は真面目に全力で相手をすると言うのだ。これを逃せばいつまでこの試合を続けても茶番にしかならないだろう。真衣自身、鳴海の本当の実力を垣間見れるのだ。彼女が一番気になっていたのはそこである。父親達を相手にしている時も、鳴海が本気で戦っている姿は見たことが無い。それを確かめる良い機会だ。

「その提案乗ったわ。時間はいつにする？」

真衣の快諾を受け、鳴海は言葉を続けた。

「卒業式の後にしよう。それで構わないよな？」

「いいわ、約束は絶対に破らないこと、いいわね？」

「俺から言ったんだ。当然だろう。卒業まで一切やらないからな。お前もちゃんと約束守れよ？」

「いいわ。じゃぁ、卒業式の後例の場所で。」

「ああ。」

鳴海はそう言うと家路に着いた。これで長かった心配事は消える。そう考えると心も軽い。2人とも能力者育成の高校に進学は決まるに違いないし、同じ高校の可能性が高い。高校まで決闘尽くしでは参ってしまう。卒業式まで2週間、それまで平和に過ごせる。それだけでも鳴海は嬉しかった。晴れやかな顔で玄関を開ける。

「ただいまー、母さん何かない？」

鳴海はカバンを投げながら奥に向かって母を呼んだ。だが、返ってきたのは父の声だった。

「鳴海、話があるからちょっと来なさい。大事な話だ。」

父がこの時間に家に居るのは珍しい。しかも声が重い。余程重要な話なのだろう。鳴海は気を引き締めて制服のまま父の書斎へ向かう。案の定父の顔色は良くなかった。鳴海は怪訝な顔で書斎のソファに腰を下ろす。

「どうしたの？何かあった？」

「鳴海、よく聞け。お前の進学についてだ・・・。」

次の日、真衣はいつものように学校に登校した。昨日鳴海と約束した決闘まで鍛錬を積みたかったが、残り少ない中学生活も捨て難い。よって学校はキチンと登校したのだ。終われば帰って父に稽古をつけてもらう。そうして決戦までに少しでも自分のスキルを磨きたかった。鳴海とは違うクラスだったが、能力者同士は近くに居る場合その存在を感じることが出来る。まだそのセンサーに引っかかっていない所を見ると遅い登校なのだろう。そう解釈し、真衣は残り少なくなった授業に集中した。だが、鳴海の存在は学校が終わるまで感知する事は出来なかった。

（何よっ！自分だけ秘密特訓でもしてるんじゃないでしょうねっ！？明日会ったらひどいんだからっ！）

真衣はそう毒突きながら学校を後にした。しかし、次の日もまたその次の日も鳴海が学校に現れる事は無く、卒業式が終わっても彼は

姿を見せなかった。約束を果たすこと無く。

★

微笑を浮かべる美少女。鳴海は頬を冷たい汗が伝うのを感じた。その笑顔は少し大人びていたが間違いなく知っている顔だった。

「や、やぁ・・・。」

鳴海の口から発した言葉はそれだけ。

「佐久間鳴海君、本当にお久しぶり。いつ以来ですっけ？あなたが約束をすっぽかしてからもう2年以上かな？」

美少女の口から出る言葉は非常に丁寧だった。だが鳴海にはどんな辛辣な言葉も掻き消えそうな怒気を孕んだ声色に聞こえる。

「まさかこの学校に居るなんて・・・、ハハハ・・・。」

「ウフフ、そうよね。私もあなたにお会いできるなんて思わなかったわ。あなたが消えてからどれだけ私が寂しかったか分かりますか？」

微笑を浮かべたまま美少女は小首を傾げる。美少女の仕草に月彦は心臓がドキドキしっ放しだ。その視線を受ける鳴海を羨ましいとさえ思った。しかし、鳴海は蛇に睨まれた蛙のように身じろぎひとつしない。

「まぁ、話せば長くなるんだけどな。とりあえず後でいいか？」

どことなく引きつった顔で鳴海は美少女から後退りする。

「鳴海、あの娘誰っ！？お前の知り合いかっ！？紹介し・・・て？ えぇぇぇ・・・。」

美少女にテンションが上がった月彦は鳴海に口早にそう言いながら言葉を失った。

「待て、真衣、話せば分かる・・・。」

「どの口でお話するつもりなのかしら？」

「頼むから・・・、落ち着け。」

「私は冷静ですよ？」

微笑む美少女はそう言いながら何処からともなく小さな木刀を抜く。それは能力者ならばよく知っている物だった。神木と呼ばれる巨大な樹から削り出した木刀で、能力者の武器のひとつである。

「待て・・・、マジで待って・・・。お前それはやり過ぎだって・・・。」

鳴海はさらに後ろに下がりながら説き伏せようとするが、美少女は聞く耳を持たないようだ。木刀を構えて一歩ずつ近付いてくる。そして、近付きながら木刀は碧色の光を発しながらその形を変化させていった。鳴海の眼前まで詰め寄ったとき、すでに手に木刀は無く、柄の両側に刃の付いた双刃の薙刀へ変化していた。

「反則だって・・・、それ刺さると俺死んじゃうんだけど・・・、痛いから止めようぜ、な？」

「佐久間鳴海君、私の口癖は覚えていますか？」

「口癖？まさかお前・・・。」

「も・ん・ど・う・・・。」

「待てっ！」

「無用！！！！！！！」

第二夜　追憶（後書き）

えー、第2回目ですが早くも心が折れそうです。

Q：あの碧とか蒼とか何？
A：そっちの方がカッコよさそうだから。
Q：気ってあんた・・・
A：想像しやすいでしょう？ドラ○ンボー○とかでよく（ｒｙ
Q：神木が変化して武器ってどうなの・・・？
A：Ｂ○ｅａｃ○とかでよく見るから想像しや（ｒｙ

【審議中】　（，・ω）　（，・ω・）　（・ω・、）　（ω・、）

【結果】（（（、・ω・，）　））なし！

第三夜　新入り（前書き）

恥ずかしいのでこの作品は消そうかどうしようか迷っています。非公開にするかもしれません。とりあえず続きが書けていたので載せときます。

第三夜　新入り

第三夜　新入り

空は晴れ渡っている。空には白い綿雲がプカリプカリと浮かび、真っ青なキャンバスを彩っていた。学内では生徒の声が高らかに上がり、青春の１ページを鮮やかに表現している。そんな初夏の昼日中、何故か命のやり取りがこの学内で繰り広げられていた。佐久間鳴海は、自分目掛けて振り下ろされた薙刀の一閃を寸での所で躱していた。刃先は先ほどまで鳴海の居た場所のちょうど首筋に当たる場所を綺麗な弧を描いて通過する。鳴海は避けた刃先に注意を向けながらバックステップで相手との距離を取った。薙刀を振るった本人は、バランスを失う事無く静止して鳴海をジッと見据えている。隙があれば今にも飛び掛らんばかりの殺気を纏いながらも、その佇まいは美しく武の手本となるような構えだった。

「ちょっと待てっ！真衣お前今、首狙ってただろっ！？当たってたら冗談じゃ済まんぞっ！」

鳴海は相手が自分を本気で殺しに来たことに強い驚きを感じていた。紛うこと無く相手は幼馴染だ。まさか本気の太刀筋が自分に向けられるとは思いもしなかったのだ。だが、現実に今相手は本気で自分の首を刈りにきた。近くで見ていた他の生徒も声を上げたが、山神真衣の一睨みで蜘蛛の子を散らすようにその場から居なくなった。

「以前のあなたなら当たる事は無いと判断しました。今はどうか知りませんけどね・・・。」

山神真衣は涼しげな目元を細めながらそう返す。鳴海はその受け答

えにまた混乱してきた。

（やばい、あれは本気でキレてる時の眼だ。逃げても鬼神の如く追ってくるだろうな。面倒な事になった。俺はあまり目立つ訳にはいかないんだが、失神でもさせないと収まりそうに無いぞ。どうする？どうすんの俺？）

山神真衣は思考に入った鳴海の隙を見逃さなかった。摺り足から一気に間合いを詰める。一瞬の隙を突かれた鳴海は反応が遅れ、薙刀の間合いにむざむざと踏み込まれてしまった。またしても閃光のような瞬きを軌跡に残し、山神真衣の薙刀は鳴海の首筋を目掛けて斬りつけてきた。焦りながらも鳴海はスウェーの要領で体を仰け反らせ一撃を躱した。眼前を研ぎ澄まされた切っ先が通過する。さらに山神真衣は反対の柄に付くもう片方の刃で鳴海の腰を薙いだが、これまた鳴海は身を翻して躱す。そして山神真衣に背を向けると脱兎の如く逃げ出した。呆気に取られて見ていた月彦も我に返ると後を追う。山神真衣は薙刀を構えたまま一瞬追う姿勢を見せたが、そのまま鳴海を追う事はせずに武器を戻すと溜息を一つ吐いて校舎に消えた。

★

山神真衣が追ってきていない事を確認し、鳴海はやっと足を止める。どこをどう走ったか分からないが、まだ学校の敷地内だった。そこに月彦が追いついてきた。まだ酸素を要求する心臓を宥めながら、鳴海と月彦は芝生に腰を下ろす。何か言いた気な月彦の視線に気付き、鳴海は頭をポリポリと掻きながら説明した。

「分かったよ。言うよ。あれは山神真衣って言うんだ。まぁ幼馴染ってやつなんだが・・・。」

「幼馴染だとっ！？幼馴染に殺されそうになったってのかっ！？お前何したの？」

「いや・・・、まぁ、その何だ・・・。よく分からんが怒らせてるみたいだな？」

「何で疑問系なんだよっ！？お前自身の問題だろうが。よく思い返してみろ。」

月彦はハッキリしない鳴海の態度に苛立ちを感じながら言葉を続ける。月彦に促され、しばらく思案していた鳴海だったが、ようやく口を開いた。

「・・・約束を破ったんだ。俺は・・・。」

神妙な顔でそう言う鳴海に月彦は戸惑った。鳴海はいつもの少しクールで人を馬鹿にしたような顔ではない。初めて見る顔だった。

「どんな約束だ？」

「決闘・・・かな？中学の卒業式の日、俺は彼女と決着を着ける約束をしたんだ。だけどその日は行けなかった。理由は知ってるだろ？３月１８日だよ。」

「あ・・・、あの日かぁ。そりゃ無理だったな。急な話だったし、何も言う暇なんか無かったのか？」

「ああ、俺も人生が狂ってテンパってたからな。大体、話の来た翌日にフランスに飛んだんだぜ。それきり会ってなかったんだよ。」

「C’ｅｓｔ　ｒｅｇｒｅｔｔａｂｌｅ．（お気の毒）」

「だよなぁ。俺も2年振りの日本でまさかいきなり再会するなんて思ってなかったんだよ・・・。」

がっくりとうな垂れる鳴海を見ながら、月彦は複雑な心境だった。話を聞くと約束は故意に破ったわけではないのが理解出来た。本当に行く事が出来なかったのだ。何故ならその日、2人して生死の境を彷徨っていたからだ。

「まぁ彼女にはよく謝る事だな。何なら俺も仲裁してやるよ。でもどうしてフランスに居たかは言うなよ。」

「言えるわけ無いだろう・・・。でも何であいつこの学園に居るんだろう・・・？」

「お前の出身って何処だっけ？」

「九州の田舎だよ。」

「・・・何で剣が峰に居んだ？」

「謎だよ・・・。本当ならもう会う事も無いと思ってたからなぁ。これからの事を考えると頭が痛いよ俺・・・。」

ちなみに剣が峰高校は北国にある。

「とにかく、詳細は触れずに話して許してもらうんだな。俺も出来るだけ協力するからさっ！」

珍しく空気を読んだ月彦はそう言うと、鳴海の背中をポンポンと叩いた。

★

翌日、3年A組の教室内で、鳴海は冷戦を味わっていた。薄々は分かっていたが、教室に入って自己紹介をしながら興味津々の視線の中に一際鋭い刺す様な視線を感じていたからだ。言わずもがなである。赤川先生は明るい表情で2人の席を決めたのだが、どういう因果か知らないが鳴海は山神真衣の隣に指名されてしまった。運命とは何と残酷なのだろうか。

「よろしくね。佐久間君。」

にっこり微笑む山神真衣に冷や汗を流しながら、鳴海は案内された席に着く。窓際の最後尾に位置するその席からは、校庭や広がる山林を一望できロケーションは悪くなかったが、問題はその反対側だった。渦巻くドス黒いオーラのようなものが体中を突き刺すような錯覚に陥る。隣の美少女はにっこりと口角を上げた整った顔の中で、瞳だけが笑っていないのを鳴海は気付いていた。

（ああ誰か俺を助けて・・・。）

鳴海はだくだくと流れる汗を拭きながら前の席を見る。そこには月彦の姿があったが、その顔を見て鳴海は援護を得る事を諦めた。月

彦は隣に座る女の子とデレデレした顔でお喋りの真っ最中だったからだ。ＨＲ（ホームルーム）中にも関わらずだ。こいつは当てにならないと男の友情の脆さを噛み締めながら、赤川先生の話を大人しく聞くしか出来ない。隣に座る山神真衣の顔など伺えるはずも無かった。

「・・・というわけで、新しく入った佐久間君と林君、あなた達のペアは隣に座る山神さんと東雲（しののめ）さんに頼みます。男の子が２人入ってくれて先生嬉しいわっ！今まで女子が２人多かったから真衣ちゃんと桜ちゃんには女性ペアを組んでもらってたけど、やっぱ男女が理想よね。青春だわっ！！！」

（この席割りはそう言う事か・・・。都合よく男女比が１：１になったから、俺らに１人ずつ女の子のペアになれと言うわけなんだな。寄りによって真衣がその女の子ペアってどう言う偶然なんだよっ！てか先生そんなキャラかよっ！青春とかバカじゃねえのっ！？）

目を輝かせながらＨＲを進める赤川先生に理不尽な怒りをぶつけながら鳴海は溜息を連発していた。能力者は基本、２～４人の編成で動くのだ。ソロは余程の事が無い限りは許されていない。貴重な能力者を失うのは国にとっても痛手だった。だから育成機関からペア行動を強いられるのだ。連携などやり易くするために、高校在学中、もしくは卒業後も同じ人間同士でペア行動をせねばならなくなる。それも男女が理想とされるため、人数と個々の能力と相談しながら１年次にペア分けされる。このクラスは女子が２人余った為に、成績が優秀な山神真衣とどこかトロそうな東雲桜嬢が同じペアになったらしい。

「真衣ちゃんは兎も角、桜ちゃんはちょっと頼りないから暫くは４人で行動してねっ！ドロドロした昼ドラみたいな展開は厳禁ですからねっ！節度を持って交際するように。以上でＨＲは終了しますっ

！質問ある子いる～？」

（交際ってバカか、あの教師・・・。）

赤川先生に敵意すら感じながら、鳴海は針のむしろから開放されるのをひたすら待った。

★

ＨＲが終わると、編入生の２人の席にクラスメートが集まってきた。皆、能力者として厳しい訓練を受ける者だったが、やはりその辺りは普通の高校生と言った所なのだろう。女子は２人を品定めするような目を向け、男子は大半が険しい顔をしていた。理由は２人のペアにある事は明白だった。山神真衣はクラスでも飛び抜けて美人の類に入る顔立ちだったし、東雲桜は守ってあげたくなるオーラをこれでもかと周りに放出している。所謂クラスのアイドルなのだろう。他の女子もかなりランクは高かったが、この２人は別格だった。それをいきなり現れた編入生２人にさらわれた形になり、クラスの男達は面白くないのも頷ける。２人に対する質問はほとんど無く、警告のような忠告ばかりが口から吐き出される。

「お前ら調子に乗るなよ？」

「真衣さんに何かしたら殺すからな。」

「桜ちゃんに触れたら殺す。」

「雑魚が。そのうち殺す。」

「お前ら辞めて最初に居た所に戻れば？」

などなど、なかなかに辛辣な言葉だ。女子はその様子を呆れたように見ていたが、どんな経緯で2人が編入に至ったのかを主に知りたがった。この学校では前代未聞な事柄だけに、興味も沸いたのだろう。鳴海はだんまりを決め込んだ為に、月彦がかなりしつこい質問攻めにあったが、予鈴と共に全員が席に戻り授業は滞りなく進められた。

★

昼休みになり、鳴海と月彦は逃げるように購買に向かうと、昼食を買って屋上に逃げた。休み時間の度に囚われの宇宙人のような目に会ったのだ。鬱陶しいを通り越して怒りゲージは満タン近くまで溜まっている。鳴海は明らかに不機嫌で、月彦も深い溜息を吐く。

「鳴海、抑えろよ。今暴れたら全部パーだぜ？」

月彦はパンを食べ終わってコーヒー牛乳のストローを咥える鳴海を宥めるように言った。彼のストローはすでに原型を留めないくらい噛み痕が付いている。かなりイライラしている事は明白だった。2人とも質問攻め中に、男子から数回頭を小突かれている。男なら確実にプライドに触れる行為だ。それで鳴海はキレかかっているのだ。

「そうは言うが月彦よ。お前はよく我慢してるな・・・。次やられたら俺はきっとパンチが出る。てか殺してしまいそうだ。」

眉根に深い皺を刻みながら鳴海はそう言って空になったパックをゴミ箱に投げ入れた。

「落ち着いて行動しようぜ・・・。俺ら何のためにここに来たか思い出せ。」

月彦はそう言いながら缶コーヒーを喉に流し込む。2人が編入したのにはちゃんとした理由がある。それは学校関係者には話せない事だった。月彦は何気なく胸ポケットに手を突っ込むとタバコを取り出す。そして鳴海に1本渡して自分も咥えると、ライターで火を付けた。紫煙がゆっくりと立ち昇り風に吹かれて消える。2人とも普段は吸わないが、ストレス発散に吸いたくなる時があった。当然だが校則では禁止事項だろうが、ここは普通の学校ではない。喫煙など注意されて終わりだろう。別に人に見られたからと言って慌てるものでもない。

「ふぅ〜。」

「ふうぅ。」

しばらく2人はそうしていたが、長い時間は続かなかった。暇潰しにもならない。この学校の昼休みは長いのだ。無駄に2時間もある。

「時間までここに居るか？教室に戻ってもいい事ないだろ？」

月彦が吸殻を飲み終わった缶コーヒーに落としながらそう言ったが、鳴海は複雑な顔をしていた。

「逃げてると思われるのも癪だな・・・。」

その返答に月彦は苦笑いを浮かべた。こうなると思っていたのだ。もう2年以上この少年と一緒に過ごしているので、ある程度性格を把握している月彦は、諦めたように立ち上がる。

「どうでもいいが殺すなよ。後々厄介だぜ。やるなら気付かれないように戦意喪失させる程度で十分だぞ？」

「お前はどうすんだ月彦？」

同じように吸殻を缶に突っ込みながら鳴海は月彦に訊ねる。

「俺は適当に躱すさ。桜ちゃんに乱暴な男と思われたくないしなっ！」

バチンと音が聞こえそうなウインクをしながら親指を立てる月彦。それをまた馬鹿を見るような目で見ながら鳴海も立ち上がる。

「それ東雲さんの前でやったら致命傷になるって事だけ覚えとけよ。俺はそろそろ戻るわ。」

そう言うが早いか、鳴海はさっさと月彦を残して階段へ通じるドアの向こうに消えた。

★

階段を下りると、山神真衣が立っていた。鳴海が現れるのを知っていたかのようだ。鳴海はチラリと見ただけでその脇をすり抜ける。

「タバコの匂い・・・。」

鳴海に聞こえるようにポツリと山神真衣が呟く。

「お前に迷惑は掛けないよ。真衣、だから俺に関わるな。」

鳴海も少し立ち止まってからそう返す。

「それは返答次第よ。あなたはまだ約束を果たしてない。それに教室での体たらくは何？あれだけ言われて腹は立たないの？そんなに弱かったかしら・・・？見込み違いしてたのかな。」

山神真衣はそう言って鳴海の目を見た。体たらくとは、何を言われても黙りを通した事を言ってるのは明白だ。確かに心中穏やかでは無かったが、鳴海は我慢していた。

「別にどうでもいいだろう・・・。俺はまだ新入りだ。郷に入っては郷に従えって言葉もあるしな。面倒事は真っ平だよ。でもまぁ、そろそろ限界だな。」

鳴海はボキボキと指を鳴らしながらそう返す。その様子を見た山神真衣の唇が微かに持ち上がる。

「で、どうするの？」

「どうでもいいだろ？俺の勝手だ。」

「ふぅ～ん・・・。じゃあね。」

「じゃあな。」

山神真衣はそれだけ言って踵を返すと廊下の向こうに消えた。鳴海はその後姿を黙って見ていたが、やがて3年A組の教室に入っていった。

★

教室に戻ってきた鳴海の周りに、またしてもクラスメートが群がる。女子はまた来る前の事を知りたがり、男子は脅迫めいた言葉を残していく。それでも友好的に接してくる男子も数人居たが、鳴海はまただんまりを決め込んで机に伏せてしまった。

「ねぇねぇ、佐久間く～ん？そうやって無視しないで教えてよ～。彼女とかいたの？私達学校の外の事あんまり知らないからさ～、もったいぶらずに教えてよ～。」

「おいおい、教えるくらいいいだろ？頼むよ佐久間。」

「林君どこ行ったの？林君に聞きにいこっか。」

女子はついに痺れを切らして月彦を探しに行った。残った男子も諦めてそれぞれに散っていく。鳴海は薄目を開けてその事を確認すると窓の外に目を移す。横になった校庭には、制服のままボールを追う生徒や芝生に座り雑談をする生徒など、一般の学校と何ら変わらない風景が広がっていた。どこかホッとする風景に怒りゲージも少しずつ減っていく。

（案外簡単に飽きられたな。）

鳴海はそう思って教室内に視線を移す。すると、すぐ傍に男のズボンが目に入った。その主はゆっくりと横の席に座る。そして鳴海の方へ向き直った。確か何度か鳴海の頭を小突いた男だ。態度は大きく、クラスでもそこそこ序列は上だと思われる生徒。

「おい転校生。お前けっこうムカつく奴だよな？なぁ。」

座るなりそう鳴海に話しかける。いや、これは明らかに絡んでいるのだろう。

（面倒なのはまだ来るんだな・・・。どうすっかなぁ・・・？）

鳴海は無言でまた校庭の方へ目を移した。はっきり言えば面倒だったのだ。黙っていればその内消えるだろうと高を括った。しかし、この男は意外にしつこかった。

「起きてるんだろうが？おい、ヘタレ。お前だよ。いい加減にしろやコラ。」

（あー面倒くせぇ・・・。どこにでもこう言うの居るな・・・。）

鳴海はノーリアクションを続ける。すると、ＤＱＮ臭いクラスメートはまた鳴海の頭を小突いた。

「シカトしてんじゃねえよ。お前殺すぞ？」

（殺すときたか。そろそろ限界だな。こいつでいいか。）

鳴海はそう考えると、無言で立ち上がった。

「やっと動きやがったな。」

そう言ってＤＱＮも立ち上がる。ヘラヘラと笑っている顔に鳴海はイラっとしながらも無言で目線を交わした。目線は少し低かった為に、見下すような視線になる。

「何見下してんだ？新入りっぽくねぇなお前。」

ＤＱＮは分かり易い。鳴海は失笑した後、小声でこう告げる。

「最初に謝っとくよ。でもお前みたいなのが居てよかった。スケープゴートに丁度いい。」

「何言ってんだおまっ！！！」

言い終わる前に鳴海の拳骨がＤＱＮの顔にめり込む。パァーンと甲高い音が教室中に響き渡った。教室中の人間がこちらを伺っていたが、皆驚いたような表情を浮かべて視線を鳴海に向けた。

「おいおい、中川君は序列１２位だぞ。謝っとけっ！殺されるぞっ！！！」

近くに座っていた少年がそう言って鳴海と中川と呼ばれたＤＱＮの間に入る。そして中川の顔を見て凍りついた。中川の鼻は綺麗に潰れ、白目を剥いて口の中から泡がブクブクと噴出していた。中川は立ったまま気絶していたのだ。

「とりあえず力を見せただけだ。強い奴が偉いんだろここは？」

鳴海はそう言うとまた机に伏せて校庭に視線を向ける。一気に教室は騒然となり、中川は糸の切れたマリオネットのように床に崩れ落ちた後、数人の男子に担がれて連れて行かれた。

第三夜　新入り（後書き）

序列とは何ぞや？
学内ランキングのような物です。この学校には様々な種目があり、拳打、斬術、模擬戦、ペア戦などの成績で優等生から順に開示しちゃうからね！と言うシステムです。当然強い者は序列の高位に君臨し、必然的に天狗になります。余談ですが真衣ちゃんはペア戦の成績が悪いので序列では１０位外にいます。桜ちゃんが超ドジっ娘で弱いのです。

ペア制度とは何ぞや？
能力者は極めて稀な存在です。殉職する者も珍しくありません。能力者の喪失を避ける為に、単独での行動は厳しく抑制されているのです。故に学ぶ課程からペア以上の戦隊を組むのが常識です。学内で最小の単位がペアとなり、そのペア相手は実力を考慮して男女から選出します。なぜ男女を組ませるかは、子孫繁栄をしやすくする為ですね。能力者同士の子供は発現率が非常に高いので、ペアで後々結婚まで行くように誘導されるわけです。今回は余った女子２名を非常に優秀な真衣とドジッ娘桜で組ませてバランスを取っていたのです。そこに男２人来たのでうまく均等に出来たと言う事です。
青春だわっ！

この辺を乗り越えられれば、少しシリアスな展開に（無理やり）持って行きたいのですが、やっぱラブ要素ほしいよね～。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8052r/

夜葬曲

2011年10月7日20時50分発行